

平新報

No. 6 目指す 實体 (二)

北海道八雲中學校 平賀仙三郎

以上は無為無不爲と云ふ本分を盡すと云ふ所謂職分... 活に於ては安穩、靜平を缺き不安や不満の念が絶ゆる時がなく、悶々としてあた

識智の齒 男芳合森

がムシがあるか云ふ疑問乳酸にも胃されやすいので、歯紙を通し磐中同窓諸君に御挨拶相叶ひ候はば此上なき幸と察じ候 恐々

健康

健康者よりも虚弱者に多く、田舎に住む人よりも都会に住む人にムシが多く

磐中同窓動靜

高知尾誠吉氏 (元教諭) 磐中同窓會士 原田田中邸内 謹啓

比佐榮一氏

比佐榮一氏 (十六回) (湯本) 中耳炎にて慶應病院に入院中だが快方に赴き近々歸家する

山崎一郎氏

山崎一郎氏 現住所は京都市上京區下鴨土河原六番ノ四京都府地方裁判所判事(十五回)

小野次氏

小野次氏 (十六回) 平大卒業後生家植田にて石炭販賣業を営んで居る。息男一過日長女生れた管理道一

松館

松館 電話五番 泉 松館 電話五番

の唱ふる泣言であるが一笑に附せられるかも知れぬが決してそんなベスマスチックな非社会的な内的生活を夢だに欲せぬ。進んで宇宙の大生命を自己の生命に取入れ、大自然の真理に契合する、永遠に消えざる活動的進取的生活に向つて精進せんとするのである。

時事研究会 發會式

在平有新聞刊紙を以てなる時事研究会發會式を去る十五日午後七時より谷口にて開催種々懇談協議をなしたるが頗る意義あるものであつた因みに同日出席者左の如く

- △磐城の質業大和田 與平 △磐城經濟新聞 鈴木正雄 野矢安孝 △磐城商工時報渡邊源吉 久野真宏 △磐城立憲新聞小泉宗雄 △平新報山野邊庄吉 『寫眞說明』 場所 平町谷口樓參階、鶴の間、向つて右より谷口仲居コマ子、山野邊、渡邊谷口喜多男、大和田、林家文子、鈴木、久野、小泉、平町町長ライト



でやむなく官選臨時村長代理のやむなきに至つたとして居る尚マサ女に對し小名濱町長は表彰するらしいは自治村として恥せねばならぬかつては玉川村に官選村長を置いた事あるがその後任村長を選挙したるが事情ありて認可がなかつたためであつたが鹿島村のそれと異り選挙會も開かずたつたツバメ(14)の瓜實の妓に代つて貰ひます皆さん相變らず四六四九だぞ

自治体を失せる 鹿島村々政

急據村長選挙會を

鹿島村長は前村長鈴木次郎村長は再び任につく郎氏が去る十一月二十八日の意志あり然らざれば同派を以つて満期につき同日吉の鈴木大藏氏を推さんとする田正義氏官選臨時村長代理も村議の大半は、荒川を命ぜられ居るが事此處に忠治氏を推さんとし又に至る迄の経過を仄聞するに一方消防組頭佐藤米

稀にみる貞女

仁俠の片岡醫院

次氏農會長佐藤高太郎氏の兩佐藤が出でんとしたが目下小名濱町竹町居住東白河郡松川村八ヶ窪に籍を有治氏を推す側となり此處に村議は二派に別れて運動を續け二十六日に選挙をなす事となつたが前村長は突然病死したるがその効なく留太は同女の隣近のものに勿論か

平町 森合 牙科 白銀 男 合 森 牙科 男 合 森

小名濱 澤満家のミドリ花柳の妓はさうなうがハバカリ藝者とはどういふ意味ですおイノチサシ同じく久敷は四ツ目と稱すゲナそれは夜が近眼鏡ハツしたら色男を見失つてある人の背に乗つて歸つた事だぞ

山崎吉平 上田外科醫院 電話二二九番 伊勢屋商店 電話四十五番

鹿島村 臨時村長代理 吉田正義 元消防組頭 新妻賛雄

玉川村 元組頭 鈴木常次郎 鈴木正直 鈴木安喜 遠藤義雄 高萩儀平 齊藤儀平 高萩儀平 佐竹硯朋 長瀬龍之助

金成通 植田町 山野邊文雄 電話六七番 飯野村長 電話二二九番 山崎吉平 上田外科醫院 電話二二九番 伊勢屋商店 電話四十五番

西村屋藥局 植田町 電話三番 常磐工業株式會社 社長 小野庄一 取締役 加藤新

入院應需 平町一丁目 諸印章木版各種 ゴム印附品一式 綿引印鋪 綿引秀親

藤沼醫院 平町紺屋町 電話五〇七番 支配人丹野寛平 内科眼科 小兒科 片岡醫院 小名濱町西町 小名濱町信用組合 長瀬金右衛門 小名濱町 立花雄七 電話五二番

酒の五 元造 長瀬五郎 村川玉郡城石縣島福